

日本語学習におけるビリーフと 自律的学習能力の関係¹⁾

— 日本語を専門とする中国人大学生を対象に —

施 敏 潔

1. はじめに

1. 1 問題提起

学ぶ力を育てることは、生きる力を育てることである（河内山（2016））。テクノロジーおよび情報に溢れた国際社会で共存共栄していかなければならない今日、生涯にわたって自ら学び続ける能力は、すべての者にとって必要不可欠である。日本語教育においても当然その重要性は常に言及されてきた。今までのように教師が学生に知識を注入することよりも、むしろ、学習の方法を学ぶ場としての学校教育の重要性が高まり、自分で学習の内容やスタイルを決定し、勉強の成果の分析を行う、つまり、学習を自分でマネージする学習者を如何に育てるかが学校教育の重要な課題として意識されるようになった。

自律的学習を「自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価すること」（新版

日本語教育事典（2005））と定義すると、確かに、カリキュラムで学習時間や学習内容がすでに決められている学校での日本語教育の場合には、学習者一人ひとりが自由意志で学習のあり方を決定する部分は少なく、授業で自律的学習者を養成することは矛盾するように見えるかもしれない。しかし、藤原三枝子（2006）によると、シラバスで外枠が決められた日本語学習であっても、学習者が教師に自分の学習をすべて委ねるのではなく、主体的に学習プロセスにかかわり、自分の学習に責任を持つ姿勢やそのための能力を養成することは、

学校教育の大きな課題と考えられる。

どうすれば効果的に学習成果が得られるかというのは、学習者本人だけではなく、彼等を教えている教師も関心を持つ課題であろう。そこから出発して、言語教授法の進展とともに学習者への関心が高まり、学習者要因に関する研究が盛んに行われてきた。学習者要因のうち、本研究で扱うビリーフは「学習者または教師が言語学習について抱く信念の総体」(藤原三枝子(2006))であり、教授法や教育環境の改善、学習者の自律的学習能力を促す手段として注目されている。また、ビリーフは具体的な学習行動を支える心的態度とされ、学習に望ましくないビリーフを抱くことによって、学習を妨げる要因にもなりうると予想されるからである。このようなことから、教師の介入によるビリーフの変容についてもしばしば議論されてきた。つまり、言語習得にとって重要であると思われる場合は、学習者がこれまで抱いてきたビリーフを学習に望ましいビリーフに変容するよう手助けをするべきであるということである。

1. 2 先行研究

学習者は、教師が指示する学習方法をただ受動的に実践する受け身の存在としてではなく、主体的に自分なりの学習方法を習得していく可能性をもつ存在である。学習者個人に起因する違い(ビリーフ、性別、年齢など)によって、学びのプロセスや到達度は異なってくる。自律的学習においては、学習者が自律的になるためのプロセスを重要視し、それをサポートするのが教師の仕事である。

韓国人日本語学習者を対象として、ビリーフとストラテジーの関係を研究ものには呉(2007)などがあり、スペイン人日本語学習者の言語学習ビリーフを究明したものは阿部(2009)などがある。中国人日本語学習者を研究対象として学習者要因を研究する成果をみると、副島健作(2014)、郭俊海(2006)などは学習ストラテジーと動機づけが学習効果にいかなる影響与えるかを研究するものが多い、尹松(2001)、岡崎博紀(2009)は言語学習観について調査したが、ほかの学習者要因との関連には述べなかった。日本語教育においては

1990年前後から自律学習に言及する文献が散見されるようになった（新版 日本語教育事典（2005））。自律的学習能力については、実証研究が少なく、英語学習者を対象にするもの（河内山（2017）、徐錦芬（2012、2014））がほとんどである。中国人の日本語学習ビリーフと自律的学習能力の関係はまだ未明の状態ではないかと思われる。

本研究では、中国人日本語学習者のビリーフと自律的学習能力の構造を明らかにし、かつどのようなビリーフが自律的学習能力に望ましい影響を与え、どのビリーフが自律的学習能力を制限しているかについて考察するだけでなく、ビリーフや自律的学習能力と学習効果の関係も検討する。それによって、教師の手助けをどのように加えたら、学習効果をアップさせるかを探ってみる。

2. 調査の概要

2. 1 調査の目的

調査の目的は、中国人日本語学習者のビリーフと自律的学習能力の構造を因子分析により把握すること、そして、ビリーフの因子と自律的学習能力の因子間の関係を明らかにすることによって、教師の手助けになるポイントを探ることにある。

2. 2 調査方法

調査に質問紙調査法を用いた。言語学習に関するビリーフを測定する尺度として、Horwitz（1987）の提案したBALLI（Belief About Language Learning Inventory）を基本にし、かつ文秋芳（2003）を参考にして、49項目からなる中国語版のBALLIを作成した。自律的学習能力を測定する尺度としては徐錦芬（2014）の英語自律的学習能力を調査する質問紙を中国人日本語学習者の状況に合うように修正したものを用いた。回答は、〈1. 強く反対する〉、〈2. 反対する〉、〈3. どちらでもない〉、〈4. 賛成する〉、〈5. 強く賛成する〉の5段階尺度で答えてもらった。

2. 3 調査の実施

調査対象は、中国国内の大学で日本語を専門として学んでいる海外留学経験（6 月以上）のない大学生で、日本語学習期間は一年間である。日本語学習歴を一年間にしたのは、進学直後の困惑動揺期が過ぎて、大学生活に慣れるようになったし、日本語学習についても自分なりの考えが築き上がったと考えられるからである。直接授業時間を一部割いてもらい、調査の趣旨を説明し、学習者の了解を得たうえで、その場で完成させ、回収するという方法でデータを集めた。調査は2016年6月に中国東部にある総合大学で行った。調査に協力してくれた学習者は74名（男20名、女54名）である。

3. 結果と分析

データを集計し、SPSS によってビリーフと自律的学習能力のそれぞれの因子分析を行い、潜在因子を抽出した。その抽出した因子及び一年間日本語学習の総合成績²⁾に対して、相関分析と重回帰分析を行い、因子間の関係と、ビリーフが自律的学習能力に与える影響と、諸因子が成績に及ぼす影響について検討した。

3. 1 因子分析の結果

3. 1. 1 ビリーフ尺度

SPSS24.0を用いてビリーフの因子分析を行った。主因子法とプロマックス法による回転後、十分な因子負荷量（0.35）を示さなかった6項目を分析から除外し、再度同じ方法の因子分析をした結果、5因子が抽出された。因子を構成する項目間の信頼性を確認するため、クロンバック（Cronbach）のアルファ係数により内的整合性を求め、0.5以上の数値を示した5因子をすべて分析の対象にした。

得られた5因子とそれに該当する各項目の因子負荷量を〈表1〉に示す。

抽出された因子に高い負荷を示している項目の内容を参考にし、命名と解釈をした。第1因子（ $\alpha = 0.911$ 、16項目）を「学習ストラテジー重視」、第2因

表1 ビリーフ尺度の因子分析結果

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
<u>第1因子 ($\alpha=0.911$) 学習ストラテジー重視</u>					
10. 学習時間を計画的にコントロールすることが望ましい学習効果を保証する力になる	0.833	0.017	-0.133	0.03	0.081
23. テキストの精読が日本語学習に重要だ	0.756	0.155	-0.029	-0.039	-0.16
11. 長期的かつ短期的な目標を立てることは日本語学習に重要だ	0.743	-0.028	0.029	0.086	-0.024
26. 日本語の新聞や雑誌、小説を大量に読むことが日本語学習に重要だ	0.731	0.223	-0.107	0.077	-0.029
22. 大量の聴解練習が日本語学習に重要だ	0.723	0.011	0.032	-0.089	0.003
19. 有効な学習ストラテジーを選ぶことが日本語学習に重要だ	0.721	-0.267	-0.055	-0.145	0.012
17. 学習ストラテジーが有効かどうかをよく反省することが日本語学習に重要だ	0.693	-0.239	0.132	0.094	-0.034
28. 単語や文の意味を推測することが重要な方略だ	0.685	0.01	0.022	0.298	0.02
13. 自分の成長を振り返ることが日本語学習に重要だ	0.655	-0.224	0.114	-0.2	0.128
25. よい文章を暗記することが日本語学習に重要だ	0.633	0.109	-0.079	0.028	0.165
16. 自分の個性を知り、長所を生かし、短所を克服することが日本語学習に重要だ	0.591	-0.004	0.112	0.122	-0.092
24. 会話練習を大量にすることが日本語学習に重要だ	0.569	0.202	0.144	-0.146	0.035
27. 繰り返しテキストを朗読することが日本語学習に重要だ	0.508	0.24	0.137	0.127	0.001
18. 毎日の学習時間を計画する必要がなく、自然に任せればいい。	0.404	-0.239	-0.003	-0.253	-0.141
21. 日本語の文型を覚えることが日本語学習に重要だ	0.402	0.157	0.21	-0.227	0.147
49. 日本語レベルをチェックする最もいい方法は翻訳だ。	0.36	0.336	-0.08	0.122	-0.002
<u>第2因子 ($\alpha=0.859$) 母語への依存</u>					
44. 日本語で話すとき、中国語で内容を前もって考えたほうがいい。	0.039	0.792	-0.166	-0.156	-0.031
43. 聞いた日本語の内容を記録するのに一番いい方法は中国語の意味をメモすることだ	-0.082	0.78	0.024	0.136	0.038
42. いい日本語作文を書くには、中国語で内容を組み立ててから書いたほうがいい。	0.03	0.775	-0.009	0.046	-0.094
41. 日本語テキストを理解するいい方法は中国語に訳すことだ	0.057	0.678	0.056	-0.019	0.097
47. 日本語単語の意味を把握するいい方法は中国語の意味を知ることだ。	-0.022	0.622	0.129	-0.027	-0.125
30. 日本語のテキストを学習する上で一番重要なことは内容を分かることだ。	-0.038	0.56	0.217	0.125	0.043
46. 母語を使うことで日本語の学習を早く進めていける。	0.009	0.554	-0.247	-0.155	0.045

39. 話すにしろ、書くにしろ、できるだけ正しい形式をとったほうがいい。いったん間違ったら、直すのが無理だから。	-0.093	0.423	0.206	-0.312	-0.096
<u>第3因子 ($\alpha=0.828$) 自己責任</u>					
31. 単語を覚えることが日本語学習に重要だ	-0.005	0.025	0.788	0.096	-0.082
15. 自分の不足に応じて対策をとることが日本語学習に重要だ	0.323	-0.054	0.605	-0.077	0.028
14. 意識的に学習のウィークポイントを見つけることが日本語学習に重要だ	0.399	-0.061	0.569	-0.072	0.134
2. 学習者本人が自分の日本語学習に主な責任をとるべきだ	0.13	-0.024	0.531	0.036	-0.277
29. 発音の練習が日本語学習に重要だ	0.336	0.151	0.503	0.004	-0.048
33. 言いたいことを日本語で正しく表現できなかったら、避けたほうがいい。	0.017	-0.162	0.444	-0.386	0.001
32. 大量の作文練習が日本語学習に重要だ	0.141	0.07	0.375	0.127	0.198
<u>第4因子 ($\alpha=0.653$) 流暢性重視</u>					
40. コミュニケーションにおいて正確性より流暢性が重要だ	0.17	0.159	-0.005	0.724	-0.184
38. 会話において、流暢に自分の意思を伝えるのが最も重要で、文法ミスを犯しても構わない	-0.04	-0.238	0.187	0.576	-0.011
34. 会話において、日本語で意思が伝えられたら、文法にこだわる必要がない	0.014	-0.378	0.13	0.528	-0.064
36. 日本語で作文を書くとき、意思表現に集中すべきで、文法が正しいかどうかは二の次のことだ	-0.044	-0.003	0.014	0.475	0.303
45. 日本語を外国語として学習すると、日本語で考えるのは無理だ	-0.234	0.134	-0.011	0.38	0.047
<u>第5因子 ($\alpha=0.717$) 失敗原因の外部帰属</u>					
1. 日本語学習がうまくできた人は外国語を学習する才能があるからだ	-0.133	0.05	0.422	0.021	0.622
3. 日本語学習がうまくできないのは中国ではいい環境が整っていないからだ。	0.076	-0.06	0.063	0.132	0.584
6. 日本語学習がうまく進んでいなくても、学生を責めるべきではない	-0.049	-0.027	-0.051	-0.09	0.576
4. 学生の成績が良くない責任は教師が持つべきだ	-0.087	-0.105	-0.152	0.109	0.569
7. 教師の日本語レベルが高くなければ、学生は必ずうまくできない	0.273	-0.003	-0.311	-0.052	0.509
35. 日本語で交流するとき、流暢性より正確性がもっと重要だ	0.014	0.334	-0.036	-0.068	0.446
37. 日本語の作文を完成してから必ず細かくチェックする必要があり、文法ミスをできるだけ避けるべきだ	-0.107	0.186	0.159	-0.166	0.381

子 ($\alpha=0.859$ 、8 項目)を「母語への依存」、第3 因子 ($\alpha=0.828$ 、6 項目)を「自己責任」、第4 因子 ($\alpha=0.653$ 、6 項目)を「流暢性重視」、第5 因子 ($\alpha=0.717$ 、7 項目)を「失敗原因の外部帰属」と命名した。6 項目の残余が発生した。

また、抽出された5 因子の内部構造をみるため、因子間の相関関係を調べた。その結果を〈表2〉に示す。

表2 ビリーフ因子間の相関関係

	学習ストラ テジー重視	母語への 依存	自己責任	流暢性重視	失敗原因の 外部帰属
学習ストラテジー重視	1	.246*	.639**	-0.039	0.105
母語への依存	.246*	1	0.147	-0.199	0.143
自己責任	.639**	0.147	1	-0.017	-0.004
流暢性重視	-0.039	-0.199	-0.017	1	0.072
失敗原因の外部帰属	0.105	0.143	-0.004	0.072	1

** . $p < 0.01$ 、 * . $p < 0.05$

「学習ストラテジー重視」は「母語への依存」と「自己責任」との二つの因子の間に統計的に有意な正の相関関係を持っていることが分かった。〈表3〉を参照しながら分析すると、平均値の前二位を占めた「自己責任」と「学習ストラテジー重視」はいずれも4 以上の得点で、かなり高い賛成傾向を示した。つまり、調査対象は学習を自分で責任を持つべきことだというビリーフがもっとも目立つ一方、各方面において適切な学習ストラテジーをとることを重要視しているビリーフも共通している。この二つの因子に有意な正の相関関係をもっていることは積極的な日本語学習ビリーフの相互促進関係を示しているであろう。また、ストラテジーを大切だと思いながら、母語への依存を補助的手段として、ストラテジーを補っている状態が分かった。前三位の「自己責任」、「学習ストラテジー重視」と「母語への依存」が三つとも「流暢性重視」と負の相関関係を表したのは、流暢性の反面にある正確性を重視するビリーフが潜んでいるためと推察される。

表3 ビリーフ因子平均値一覧

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
自己責任	74	3	5	4.2815	0.44133
学習ストラテジー重視	74	3	5	4.109	0.40479
母語への依存	74	1.75	5	3.3666	0.62734
失敗原因の外部帰属	74	1.71	4.43	2.8668	0.50012
流暢性重視	74	1.33	4	2.7883	0.51188

3. 1. 2 自律的学習能力尺度

自律的学習能力尺度をビリーフと同じ方法で因子分析を行い、7 因子が抽出された。そのうち、1 因子の α 係数が0.5に満たさなかったため、それを除外した6 因子を分析の対象にした。各因子とそれに該当する項目の詳細は〈表4〉の通りである。

表4 自律的学習能力因子分析結果

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
<u>第1 因子 ($\alpha=0.922$) 学習ストラテジーの評価と調整</u>						
18. 学習過程で、実情に合わない読解ストラテジーだと分かったら調整する	0.914	-0.078	0.025	0.156	-0.069	-0.024
19. 学習過程で、実情に合わない聴解ストラテジーだと分かったら調整する	0.901	-0.038	-0.097	0.079	0.121	-0.034
17. 学習過程で、実情に合わない作文ストラテジーだと分かったら調整する	0.844	-0.103	0.007	0.125	-0.04	-0.058
20. 学習過程で、自分の学習法を評価し、問題を探し出して解決法を考える	0.694	0.229	0.065	0.019	0.004	0.016
16. 学習過程で、実情に合わないコミュニケーションストラテジーだと分かったら調整する	0.684	0.204	-0.236	0.101	0.072	-0.052
21. 自分の学習法が実情に合わなかったら、変更する	0.48	0.028	-0.257	-0.111	0.456	0.173
<u>第2 因子 ($\alpha=0.878$) 目標と計画設定</u>						
8. 必要があれば、学習計画を調整する	-0.018	0.819	0.011	-0.047	-0.019	-0.038
9. 日本語を学習する時間を計画的に考える	0.241	0.783	-0.008	-0.183	0.101	0.071
7. 自分の実情に合わせて学習目標を立てる	-0.073	0.721	0.139	0.023	-0.081	-0.116
10. 『日本語教育大綱』に基づいて自分の学習目標を立てる	-0.085	0.707	0.018	0.098	0.142	0.089

11. 日本語学習ストラテジーが分かる	0.031	0.589	-0.005	0.07	0.135	-0.01
<u>第3 因子 ($\alpha=0.844$) 学習過程のモニター</u>						
32. 学習が一段落終わったら、前に習った知識への理解をチェックして更新する	-0.191	0.135	0.909	-0.13	0.087	0.044
31. 学習を完成させると同時に、すでに立てた計画に合っているかどうかを確認する	-0.108	-0.02	0.863	0.17	0.089	-0.018
27. クラスメートや友達と共同学習する	0.325	0.039	0.553	-0.181	0.161	0.036
23. 授業以外に日本語を学び、使うチャンスを自主的に探す	0.072	-0.058	0.439	0.056	0.158	-0.091
30. 有効な学習法を選び、より良い日本語学習者になる	-0.167	0.172	0.391	0.23	0.383	-0.007
<u>第4 因子 ($\alpha=0.876$) 学習ストラテジーの有効使用</u>						
15. 意識的に有効な作文ストラテジーをとる	0.125	-0.11	-0.207	0.987	0.219	-0.034
14. 意識的に有効な読解ストラテジーをとる	0.152	0.162	0.32	0.551	-0.171	-0.091
5. 教師の教授進度についていける。	0.077	-0.054	0.054	0.52	0.042	0.202
13. 意識的に有効なコミュニケーションストラテジーをとる	0.087	0.176	0.126	0.519	-0.149	0.006
12. 意識的に有効な聴解ストラテジーをとる	0.227	0.052	0.196	0.51	0.009	-0.008
<u>第5 因子 ($\alpha=0.816$) 学習過程の評価</u>						
29. 自分の言語ミスが分かったら、原因を見つけたうえで直す	-0.13	0.184	0.161	0.164	0.61	-0.02
22. 日本語学習法が自分に合うかどうかははっきりわかる	0.289	-0.042	0.297	-0.19	0.607	-0.028
28. 日本語を学習する時自分の言語ミスが分かる	-0.057	0.259	-0.045	0.17	0.487	-0.004
26. 新しく学習した知識を実践する	0.176	-0.196	0.417	-0.02	0.436	0.055
25. すでにある学習資源を利用する	0.019	-0.019	0.006	0.358	0.369	0.016
<u>第6 因子 ($\alpha=0.835$) 教学目标と要求への理解</u>						
1. 教師の教学目标と要求が分かる	-0.156	-0.117	-0.121	-0.023	0.169	0.893
2. 教師の教学目标と要求を自分に合う学習目的に転ずることができる	-0.133	0.063	0.154	0.29	-0.083	0.659
3. 教師の学習目的と要求を自分に合う学習目的に転じた上で頑張ることが重要だ	0.089	0.143	-0.031	-0.043	0.075	0.608
4. 教師が行うクラス活動の目的、意味が分かる	0.341	-0.009	0.234	-0.026	-0.271	0.599

抽出された因子を構成項目の内容を参考にし、因子の解釈と命名を行った。第1因子 ($\alpha = 0.922$ 、6項目) を「学習ストラテジーの評価と調整」、第2因子 ($\alpha = 0.878$ 、5項目) を「目標と計画設定」、第3因子 ($\alpha = 0.844$ 、5項目) を「学習過程のモニター」、第4因子 ($\alpha = 0.876$ 、5項目) を「学習ストラテジーの有効使用」、第5因子 ($\alpha = 0.816$ 、5項目) を「学習過程の評価」、第6因子 ($\alpha = 0.835$ 、4項目) を「教学目标と要求への理解」と命名した。残余項目は2項目である。

次に自律的学習能力の6因子間の相関係数を求めた。詳細は〈表5〉に示す。

表5 自律的学習能力因子間の相関関係

	学習ストラテジーの評価と調整	目標と計画設定	学習過程のモニター	学習ストラテジーの有効使用	学習過程の評価	教学目标と要求への理解
学習ストラテジーの評価と調整	1	.502**	.414**	.591**	.587**	.546**
目標と計画設定	.502**	1	.597**	.624**	.564**	.512**
学習過程のモニター	.414**	.597**	1	.687**	.660**	.452**
学習ストラテジーの有効使用	.591**	.624**	.687**	1	.608**	.509**
学習過程の評価	.587**	.564**	.660**	.608**	1	.542**
教学目标と要求への理解	.546**	.512**	.452**	.509**	.542**	1

** . $p < 0.01$ 、* . $p < 0.05$

自律的学習能力の6因子間において、すべての因子間で有意な正の相関関係がみられた。自律的学習能力は相互に関連を持ち、ある自律的学習能力の活用によって、ほかの自律的学習能力を促す効果があると解釈できる。〈表6〉で展示されたように、因子平均値の下降順並びの中、一位の「教学目标と要求への理解」と二位の「学習ストラテジーの評価と調整」が4以上の得点で、もっともよくできている自律的学習能力ということが分かった。一番下位の「学習過程のモニター」は調査したところでは、まだ自信のない部分で、これから工夫する、期待できる領域であろう。自律的学習能力とは以下の三つがあげられる：

- ① 自分で決定する能力、なすべきことを他者に指示されることが少ない

② 自分の学習に対する責任を引き受ける意志と能力

③ 批判的な省察力や自律的な行動力

これらの能力を獲得するためには、次の三つが適当と考えられる：

① 自分自身の学習プロセスを形成する

② 自分自身の学習プロセスをモニターする

③ 自分自身の学習プロセスを評価する（藤原三枝子（2006））

本調査結果からは、自分自身の学習プロセスを形成、評価することはモニターよりよくできていることは明らかである。

表 6 自律的学習能力因子平均値一覧

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
教学目標と要求への理解	74	3.00	5	4.1941	0.49092
学習ストラテジーの評価と調整	74	2.17	5	4.0022	0.56927
学習過程の評価	74	3.00	5	3.9526	0.52548
目標と計画設定	74	2.60	5	3.9316	0.58928
学習ストラテジーの有効使用	74	2.00	5	3.9184	0.59882
学習過程のモニター	74	2.20	5	3.8737	0.61000

3. 2 ビリーフと自律的学習能力の因果関係

ビリーフが自律的学習能力に与える影響を検討するため、ビリーフと自律的学習能力の各因子の項目の得点を算出し、その得点について重回帰分析を行った。その結果、「学習ストラテジーの評価と調整」と「流暢性重視」、「教学目標と要求への理解」と「母語への依存」の間に有意な関係にあることが分かった。

詳細な分析結果は〈表 7〉に示す。

全体的にみると、有意な関係が少なく、マイナス関係が多数にあることで、因果関係がはっきり示されていないとはいえ、「学習ストラテジー重視」や、「母語への依存」と「自己責任」という三つの上位因子は自律的学習能力に肯定的な働きをするビリーフであることが分かった。その反面、「流暢性重視」

表7 ビリーフと自律的学習能力の重回帰分析結果

	B1	B2	B3	B4	B5	R2
	β	β	β	β	β	
J1	0.088	0.100	0.057	-0.242*	-0.023	0.104
J2	0.154	0.088	0.049	-0.082	-0.037	0.062
J3	0.046	0.034	0.092	-0.189	0.015	0.059
J4	0.084	0.072	0.037	-0.213	-0.061	0.077
J5	0.004	0.039	0.085	-0.189	-0.079	0.057
J6	0.023	0.264*	0.167	-0.122	-0.002	0.148

ビリーフ因子

B1 学習ストラテジー重視
 B2 母語への依存
 B3 自己責任
 B4 流暢性重視
 B5 失敗原因の外部帰属

自律的学習能力因子

J1 学習ストラテジーの評価と調整
 J2 目標と計画設定
 J3 学習過程のモニター
 J4 学習ストラテジーの有効使用
 J5 学習過程の評価
 J6 教学目標と要求への理解

*. $p < 0.05$ β : 標準偏回帰係数 R2 : 重決定係数

と「失敗原因の外部帰属」は日本語学習に正確性に欠くことや、失敗の原因を環境や他人などにし、自分自身の努力によるものではないという意味合いがあるから、自律的学習能力にマイナス効果を及ぼしたといえよう。

3. 3 ビリーフや自律的学習能力と成績の因果関係

日本語をゼロから始めて一年間の総合成績をビリーフや自律的学習能力と重回帰分析すると、〈表8〉のような結果が出た。

表8 ビリーフや自律的学習能力と成績の重回帰分析結果

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	B1	B2	B3	B4	B5	R2
	β	β	β	β	β	β	β	β	β	β	β	
成績	-0.188	-0.042	0.064	0.390*	-0.244	0.142	0.04	-0.231	0.123	0.023	-0.133	0.192

*. $p < 0.05$ B と J の意味は〈表7〉に参照

ビリーフと自律的学習能力の総計11因子のうち、ただ「学習ストラテジーの有効使用」が成績と有意な正の関係を示した。すなわち、自律的学習能力の因子に学習効果に直接プラス効用を与えるのは学習ストラテジーの適宜な使用のみである。具体的に言うと、意識的に有効な聴解ストラテジー、コミュニケーションストラテジー、読解ストラテジー、作文ストラテジーを取ることで、よりよい日本語能力を身につけることに導く。

自律的学習能力が成績に与えた影響をもう一步はっきりさせるために、学習効果によって、調査対象を成績上位組と成績下位組³⁾に分けて、もう一回重回帰分析を行った。結果の詳細は〈表9〉の通りである。

表9 成績上位組と下位組のビリーフや自律的学習能力と成績の重回帰分析結果

		J1	J2	J3	J4	J5	J6	B1	B2	B3	B4	B5	R2
		β	β	β	β	β	β	β	β	β	β	β	
成績	上位組	-0.002	-0.255	-0.187	0.395	0.6	-0.494*	0.038	-0.148	0.134	-0.107	0.258	0.339
	下位組	0.163	-0.213	0.074	-0.035	-0.234	0.095	0.419	-0.432*	0.08	0.085	-0.172	0.451

*, $p < 0.05$ BとJの意味は<表7>に参照

成績上位組の結果では、「教学目标と要求への理解」が成績に負の有意関係にある。つまり、教師のことを聞くだけでは、成績向上に肯定的効果がもたらさないことを意味しているであろう。もっと自分のペースにそって、自分で自分の学習を管理し、コントロールするほうが望ましい学習効果が出るのではないと思われる。

成績下位組の分析データを見ると、「母語への依存」と成績の間に負の有意関係を見せた。母語への依存が強ければ強いほど、成績にマイナス効果を及ぼしてしまうし、母語への依存から抜け出せないために、成績が下位にあったともいえるであろう。

4. 考察および結論

4. 1 考察のまとめ

本稿では中国人日本語学習者の日本語学習におけるビリーフと自律的学習能力の因果関係、自律的学習能力と成績の因果関係を因子分析と重回帰分析により検討した。ビリーフと自律的学習能力を一つのプロセスとして考えることにより、より総合的に中国人学習者を理解することができた。

日本語学習ビリーフをまとめると、49項目を因子分析し、五つの因子が抽出され、「学習者本人が自分の日本語学習に主な責任をとるべきだ」、「自分の不足に応じて対策をとることが日本語学習に重要だ」などを含めた因子「自己責任」が圧倒的に高い得点で、日本語学習を他人に頼らず、ちゃんと自分で積極的に扱う態度が現れた。また、「学習時間を計画的にコントロールすることが望ましい学習効果を保証する力になる」、「長期的かつ短期的な目標を立てることは日本語学習に重要だ」などの内容を含めた因子「学習ストラテジー重視」も4以上の得点で、意識面において、十分なストラテジー準備が整えたといえよう。「会話において、流暢に自分の意思を伝えるのが最も重要で、文法ミスを犯してもかまわない」、「コミュニケーションにおいて正確性より流暢性が重要だ」などという項目なら成る因子「流暢性重視」が一番低い点数を取ったことは、日本語をゼロから初めて一年になったばかりの学習者にとって、文法的に正しく日本語を運用することに精いっぱい、正確性に拘りすぎていることを意味しているのではないかと推察される。相関関係の面では、因子「自己責任」と「学習ストラテジー重視」、「母語への依存」と「学習ストラテジー重視」が2組の有意な相関関係を見せたが、自主的に学習ストラテジーを重視する面と補足的に学習ストラテジーを重視する面が同時に存在していることは事実である。

自律的学習能力をまとめると、32項目から6因子が抽出され、すべて有意な正の相関関係にある。因子間の相互関連が緊密で、相互促進関係を築いたことが明らかである。平均値から考察すると、「教師の教学目的を自分に合う学習目的に転ずることができる」、「教師が行うクラス活動の目的、意味が分かる」

などの項目からなる因子「**教学目标と要求への理解**」が一位を占め、高校時代からの教師優先観、あるいは自分の学習を教師から離さずに運営していく心理がよく表れた。2位を占めたのは因子「**学習ストラテジーの評価と調整**」で、項目内容は「**学習過程で、実情に合わないコミュニケーションだと分かったら調整する**」、「**学習過程で、自分の学習法を評価し、問題を探し出して解決法を考える**」などである。行動面で確実に学習ストラテジーを活用し、効率的に変更したりする姿勢をみせた。一方、最下位の因子「**学習課程のモニター**」は「**学習が一段落終わったら、前に習った知識への理解をチェックして更新する**」、「**学習を完成させると同時に、すでに立てた計画に合っているかどうかを確認する**」などの内容を含めたが、まだ欠けている能力で、これからの学習指導に見逃してはならないことである。

学習ビリーフと自律的学習能力の因果関係を重回帰分析によって行ったが、ビリーフ因子「**母語への依存**」と自律的学習能力因子「**教学目标と要求への理解**」とは正の有意関係を示した一方、「**流暢性重視**」と「**学習ストラテジーの評価と調整**」の間に負の有意関係を見せた。言い換えると、日本語を教える教師は中国人がほとんどだから、教学目标や要求を理解するのに、母語に頼ってするケースが普通である。また、学習ストラテジーの評価と調整する場合、日本語をもっと正確に使えるようになるという目的か、或いは基準が存在していると考えられる。流暢に交流できるかどうかは、日本語学習が一年になる段階では二の次の目標で、意識的でも行動的でもまだ十分に満たす余裕が無いということも現実である。

4. 2 日本語教育への示唆と今後の課題

今回はデータ量が十分得られなかったためか、「**学習ストラテジー重視**」というビリーフ因子は「**学習ストラテジーの有効使用**」や「**学習ストラテジーの評価と調整**」という自律的学習能力の因子との間には関連があるのではないかという予想通りの因果関係が出なかったが、日本語教育をしている教師の仕事に示唆があると考えられる。

まずは「母語への依存」というビリーフを指導法改善の考慮に入れたほうがいいこと。なぜかという、〈表 9〉を見てわかるように、下位組の成績と「母語への依存」の間に負の有意関係があるだけではなく、上位組の成績と「教学目标と要求への理解」と負の有意な関係を見せた結果の裏に、〈表 7〉で示された通り、有意な関係もではなっていないが、「教学目标と要求への理解」と「母語への依存」とは正の相関関係であることが潜んでいる。つまり、成績の上下を問わず、学習効果はいずれも「母語への依存」と負の有意関係を持っていることには疑問がない。

次は学生の言語習熟程度に沿って指導すること。また〈表 9〉に基づいて分析するが、上位組と下位組の成績と有意関係を持つ因子はそれぞれ違うし、係数の差も大きい。学習者の実情に合わせて言語指導を行わなければ効果が出るのが難しいと思われる。特に限られた期間内で検定試験を準備する際、学習者をプレースメントテストによって、レベルの近い者同士が集まり、実力に相応しい練習やテストをさせるのが比較的に望ましい結果に結びつくのではないか。

今後は今回の調査結果を土台にして、複数の学習者要因、たとえば学習ストラテジー、動機づけ、不安などを総合的かつ動態的に考察し、学習効果との関連を明らかにしていきたい。

注

- 1) 本研究は浙江万里学院の研究費補助金の助成を受けたものである。
- 2) 一年間すべての科目の成績を換算したもので、学年ごとにランキングして、奨学金申請の基本となるもの。
- 3) 5点満点の成績を中位の3をわき目として、3点以上（3点も含める）が成績上位組、3点以下を成績下位組と見なす。

参考文献

- Horwitz. (1987) "Surveying Student Beliefs about Language Learning." in Wenden, Anita & J. Rubin (eds). *Learner Strategies in Language Learning*. Puentice-Hall.
- 阿部新 (2009) 「スペイン・マドリードの大学における日本語学習者の言語学習ビリー

- フ」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第37号、名古屋外国語大学、pp25-62.
- 尹松（2001）「日本語学習者のビリーフについての意識調査－中国首都師範大学の場合－」『日本語教育研究』第41号、言語文化研究所、pp115-129.
- 岡崎博紀（2009）「中国人日本語学習者の言語学習観の調査－中央民族大学外国語学院日語専業の場合－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号、pp37-50.
- 郭俊海、全京姫（2006）「中国人大学生の日本語学習者の動機づけについて」『新潟大学国際センター紀要』第2号、新潟大学、pp118-129.
- 河内山明子（2013）「自律的学習者要因はどのように成績に差をもたらすのか－動機づけ、情意、メタ認知方略、能力による学習モデル－」『JACET 関東支部学会誌』第9号、pp25-34.
- （2016）「自律的学習モデルの構築にむけた理論とフレームワーク」『明星大学研究紀要－教育学部』第6号、pp65-84.
- （2017）「英語学習者における自律の研究－学習モデル構築に向けた動機づけ、情意、メタ認知、方略要因の測定および因子分析－」『明星大学研究紀要－教育学部』第7号、pp37-61.
- 呉禧受（2007）「日本語学習におけるビリーフと学習ストラテジーの関係－日本語を専門とする韓国人大学生を対象に－」『ことばの科学』第20号、名古屋大学言語文化研究会、pp49-64.
- 副島健作、金城尚美、武藤彩加（2014）「中国における日本語学習者の日本語力に影響を及ぼす外的学習者要因」『国際文化研究科論集』第22号、pp19-31.
- 藤原三枝子（2006）「外国語教育における自律的学習者の養成：『ひたすら、ただただ繰り返す』ストラテジーから、学習をマネジメントするストラテジー習得へ」『言語と文化』第10巻、明治学院大学言語文化研究所、pp83-114.
- 徐锦芬・李斑斑（2014）「学习者可控因素对大学生英语自主学习能力的影晌」『现代外语』第5期、pp 647-656.
- ・喻秀文（2012）「基于学习者反思周记的大学生英语自主学习影响因素研究」『外语教育』第3期、pp 1-8.
- 文秋芳（2003）『英语学习成功之路』上海外语教育出版社.

